

山と博物館

「山と博物館」は自治会などを通じ全戸配布されるほか、市役所および関連施設で配置配布しています。また博物館公式 Web からご覧いただけます。

2025
夏号
第70巻2号

無料
Free

表紙の1枚 1
・今年度も野生復帰に向けた繁殖の取組が開始しました
さんばく研究最前線 2・3
・収蔵資料から見る戦時下の登山 ー戦後80年に際してー
企画展特集 4・5
・企画展「大町にも火山灰が降った?!」

展示・イベントのご案内 6
博物館のひろば 7
付属園だより／お詫びと訂正／
人事異動のお知らせ／山博友の会だより 8
・「さんばく付属園まつり」／総会記念講演会／
春の自然観察会



同居中のペア

今年度も野生復帰に向けた繁殖の取組が開始しました

岡本 真緒

今年度もライチョウの繁殖が始まり、5月6日より2組のつがいの同居を開始しました。一方のペアは昨年引き続き大変相性がよく、行動を共にし、オスの求愛ディスプレイや交尾が見られています。もう一方のペアはメスがやや落ち着きがない様子ですが、求愛ディスプレイや交尾が見られています。無事に産卵し、たくさんの子が孵化してくれることを願っております。

令和6年度に山岳博物館では、繁殖した雛5羽の野生復帰を行いました。令和7年度も順調にいけば、同様の方法で野生復帰を行う予定です。野生復帰できる個体、そして野生復帰後も厳しい山岳環境で暮らしていくことのできる個体を育てられるように、他の野生

復帰参画園館をはじめとする関係者の皆様と、情報交換を行いながら進めてまいります。また、今年度は中央アルプスにおけるライチョウの野生復帰事業が最後の年となる予定です。来年度以降は環境省が、中央アルプスの個体群が人の手を加えなくとも存続できる集団かどうかを評価するために、モニタリングを実施していく計画となっています。

今年はライチョウの野生復帰技術確立のための重要な年となるかと思っておりますので、気を引き締めて事業に取り組みます。生き物相手ですので、何が起こるか分からない中での取組となりますが、温かく見守っていただければ幸いです。（市立大町山岳博物館 学芸員）

- ◆市立大町山岳博物館は付属園を含め、月曜日と祝日の翌日が休館です。ただし、月曜日が祝日の場合は開館し、翌日休館となります。このほか、年末年始は休館となります。
- ◆開館時間は次の通りです。4～11月：午前9時～博物館：午後5時（入館は午後4時30分まで）・付属園：午後4時30分（入園は午後3時30分まで）、12～3月：午前10時～博物館・付属園：午後4時（入館は午後3時30分まで）。
- ◆毎月第3日曜日の「家庭の日」とその前日の土曜日は、「大町市民無料開放デー（長野県民割引）」として、大町市民の方は観覧料が無料です。また、この日は長野県民の方も団体割引料金で観覧いただけます。今季の該当日は7月19・20日、8月16・17日、9月20・21日です。この機会にぜひご来館ください。
- ◆次の方は通年、いつでも博物館を無料で観覧いただけます。《障がい者手帳をお持ちの方と付き添いの方1名／未就学児／大町市内小・中学校に通う児童・生徒／大町市在住の高校生／大町市在住の65歳以上の方》このほかにも観覧料の各種割引があります。詳しくは受付窓口でお尋ねください。



博物館施設案内
はこちら

収蔵資料から見る戦時下の登山 —戦後80年に際して—

関 悟志

1945（昭和20）年8月15日、アジア・太平洋戦争は日本の降伏で終結しました。今年2025（令和7）年は、戦後80年という節目の年を迎えます。“戦争と登山”というと、両者は一見かけ離れた存在に感じるかも知れません。しかし、戦前・戦中・戦後という当時の時代において、あらゆる事柄に通じることですが、登山も戦争と全くかわりがなく存在していたわけではありませんでした。

これまで、2015（平成27）年の戦後70年、2020（令和2）年の戦後75年の際、「さんぱく研究最前線」のパネル展示では、学徒兵入隊直前の学生などの墨跡が残された鹿島山荘の「登高記念」帳、軍用鳩を利用した伝書鳩による山岳通信を行った中部山岳鳩協会について、それぞれご紹介しました。

こうしたテーマでは3回目を数える今回、戦後80年に際して、これまで同様、平和の尊さにあらためて思いを巡らすためにも、当館で収蔵する山岳資料などの中から、戦争と何らかのかかわりを持った品物や事柄をいくつかご紹介します。

小谷部全助のピッケル



小谷部全助使用ピッケル

日本山岳会寄託

大正末期頃から、より困難な岩壁の登攀や積雪期の登山を追求するアルピニズムを志向した近代登山が国内で展開されるようになります。その担



ピッケルを手にする小谷部全助

1935（昭和10）年頃 当館蔵

い手となったのが旧制高校や大学の山岳部でした。そのなかにおいて、東京商科大学一橋山岳部に所属した不世出のクライマー小谷部全助とそのザイル・パートナー森川眞三郎らの活躍はめざましいものがありました。

1939（昭和14）年1月、小谷部は兵役入隊の際に胸部の疾患が見つかりました。肺結核でした。小谷部はヒマラヤへの遠征登山も将来に見据えていたようですが、その後、病気は回復せず、信州の富士見高原療養所で高地療養生活を送ります。しかし、病状は悪化し続け、1945（昭和20）年12月に最期を遂げました。一方、ザイル・パートナーであった森川も同様に肺結核を患っており、同じく富士見高原で療養中でしたが、奇しくも、小谷部と日を全く同じくしてこの世を去りました。

両者と東京商科大学一橋山岳部の同期で盟友であった望月達夫は、1947（昭和22）年に復員

して初めてふたりの悲報に接し、慟哭どうこくしたといひます。望月は小谷部愛用のピッケル（山内571番）を大切に保管し、後に日本山岳会へ寄贈しました。現在、同会から寄託を受け、当館展示中のこのピッケルからは、岳人たちの固い絆きずながしのばれます。

撤収された 上高地のウェストン レリーフ



ウェストン レリーフ 上高地 ウェストン園地

英国人宣教師ウォルター・ウェストンの功績を称え、上高地の河童橋近くの岩壁には、その横顔をかたどった鋼製レリーフが埋め込まれています。現在、上高地散策の見所のひとつとなっているこのレリーフですが、戦時中の一時期、取り外されたことがありました。

ウェストンのレリーフは日本山岳会有志によって1937（昭和12）年、上高地に掲げられました。しかし、戦火が激しくなると地元青年会から、敵国人の像を上高地に置くのは不届きであるとの申し立てが同会へ持ち込まれ、さらに戦局の悪化による不安定な時勢も手伝ってか、一部国粹主義の青年らがレリーフを破壊するとの風評も立つようになります。これを危惧した同会は、1942（昭和17）年11月の臨時役員会でレリーフ取り外しを決定し、この会議出席者の中から山岳画家の茨木猪之吉と明治大学山岳部出身の交野武一が撤収作業のため上高地へ赴くことに。翌12月、ふたりは取り外し作業を秘密裏に遂行するため、人目を気にしながら冬の上高地入り。レリーフは松

本の石工2名の手によって取り外されます。取り外したレリーフは茨木のザックの中へ丁寧に収められ、一行は逃げるように上高地を後にしたといひます。

レリーフは東京へ持ち帰られ、同会事務所で保管中、空襲による戦災でレリーフの一部が焼け溶けますが、後に修復されて1947（昭和22）年に再び上高地の元の場所に取り付けられました。その後、1965（昭和40）年制作の新しいレリーフに取り替えられて現在にいたります。

朝鮮戦争の米軍放出品



登山で使用された米軍放出品

当館蔵

最後にご紹介するのは、戦後の出来事とかかわりのある資料です。

毛糸製セーター、毛糸製ズボン下、毛糸製目出帽、毛布製寝袋、未開封の缶入り携行食糧（レーション）、水筒、携帯燃料一式。これら登山用具7点は、登山愛好家であった旧蔵者が1955（昭和30）年頃、朝鮮戦争（1950～1953（昭和25～28）年）時の米軍放出品（払下品）を登山用に購入し、以降、信州方面の冬山などで使用したものです。

当時、こうした米軍放出品の道具や衣類などが日本で販売されており、品物の丈夫さから、国内では登山者が登山用具として使用しました。

（文中、敬称略） （市立大町山岳博物館 学芸員）

今回ご紹介した資料のうち、小谷部全助のピッケルについては、1階展示室の常設展コーナー「山と人 北アルプスと人とのかかわり」に展示中ですので、ご来館の際にはぜひご覧ください。

「大町にも火山灰が降った?!」

開催期間

令和7(2025)年9月13日(土)～12月7日(日)

見どころ紹介

現在、日本各地に活火山は100以上ありますが、大町市街地から直接見られる活火山はありません。ですが、太古の昔には大町からも噴煙が見え、大量の火山灰が降り注いだり、火砕流で覆われた時代があったと考えられています。大町市の西側には北アルプスが南北150kmにわたり悠々と連なっていますが、不動に見えるこれらの山々の成り立ちは一様ではありません。約176万年～165万年前には穂高岳や爺ヶ岳が破局的な大爆発を起こし、膨大な量の火山噴出物を吹き出しました。火砕流や火山灰が大町地域にも堆積して、現在の大町市東側に標高1000m内外の大峰山地として残っています。さらに、その山地の平坦面上には赤茶色の土の層が数m～10m以上積み重なっている場所があります。この土の層は「大町テフラ層」とよばれる主に数十万年前以降に活動した^{もみさわ}縦沢岳や立山の^{ふうせいじん}火山噴出物および風成塵です。大町テフラ層については、過去にも盛んに研究されていましたが、当時模式地とされていた露頭(地層の崖)はほとんど消滅しているのが現状です。しかしながら中山高原には数十万年間の地層が連続して見られる露頭が奇跡的に残っています。“絶滅危惧種”な大変貴重な露頭であり、記録して残すべきであると考え2年間調査してきました。今年の企画展では、改めて「大町テフラ層」に焦点を当てて、この露頭の地質調査を通してわかったことを中心に、既知の成果と合わせてどのような火山活動であったのかを紹介します。

展示内容

大町に降った火山灰「大町テフラ層」とは？

中山高原(旧大町スキー場)でみられる茶色の地層「大町テフラ層」とはどのようなものか。その特徴を写真や図とともに含まれる鉱物の分析結果をグラフで紹介します。それが意味するものとは？



中山高原の大露頭(数十万年間の地層が連続して見られます)

火山灰のふるさとを訪ねて



立山五色ヶ原付近
(立山Dテフラの噴出源といわれている)

大町に降った火山灰の噴出源を求めて訪れた現在の立山火山のようすを写真で紹介し、過去の研究成果からわかっていることについて解説します。

また、北アルプス以外の遠来（鹿児島県や鳥取県などから）の“広域火山灰”についても実物とともに展示・解説します。



立山Dテフラの鉱物

露頭で実践！

地層が見られる崖を露頭といいます。地層からは、さまざまな情報が得られます。よく観察することが大切です。調査方法や鉱物分析の手法の一部について紹介します。露頭からはぎ取った地層や分析のための道具も展示します。また、毎年中山高原の露頭を理科の野外学習として活用している地元小学校の授業実践のようすも紹介します。



地層のはぎ取り



野外授業のようす

長野県の活火山



2014年御嶽山噴火（翌日9月28日撮影）

長野県内および周辺地域で現在活動中の活火山について紹介します。2014年の御嶽山噴火時の周辺の写真や実物の火山灰をご覧ください。



御嶽山東麓にて（9月28日）



理科室で鉱物観察

ぜひ、この機会に太古の昔の火山活動のようすを直接目で見て、手で触れて、感じて（においもするかも？）……体感しにお越しください。

（専門員 竹村健一）

展示解説

9月20日（土）・11月15日（土）・12月6日（土）

10：00～・14：00～（各20分）

午前・午後同じ内容です。

特別展示室 ※通常の観覧料が必要です。

展示・イベントのご案内

企画展 「大町にも火山灰が降った?!」

北アルプスから噴出した火山灰などから構成する「大町テフラ層」についての当館専門員による企画展です。

- 期間 令和7年9月13日(土)～12月7日(日)
- 時間 午前9時～午後5時
(入場は午後4時30分まで)
12月～：午前10時～午後4時
(入場は午後3時30分まで)
- 会場 当館 特別展示室
- 費用 通常の観覧料(常設展と共通)が必要です。

企画展 関連催し

現地見学会

大町テフラ層の露頭を見学します。現地調査をした専門員が説明します。

- 期日 令和7年10月18日(土)※雨天中止
- 時間 午前10時～午前11時30分
- 場所 中山高原(旧大町スキー場付近)
※直接中山高原駐車場に集合してください。汚れてもよい服装でお越しください。
- 対象・定員 小学生以上20名
- 費用 参加費無料
- 申し込み 要事前申込(受付開始日など詳細は後日、特別展チラシや当館ホームページで告知)

室内講習会

「火山灰の洗い出し」～キラキラ世界へ～

火山灰にはどのようなものが含まれているのでしょうか?土からキラキラ輝く“宝石”が見つかるかもしれません。

- 期日 令和7年11月22日(土)
- 時間 午前10時～正午
- 会場 当館 講堂
- 対象・定員 どなたでも20名
- 費用 参加費無料
- 申し込み 要事前申込(受付開始日など詳細は後日、特別展チラシや当館ホームページで告知)

自然ふれあい講座

「みんなで温暖化ウオッチ ～セミの抜け殻を探せ! in 大町～」

地球温暖化が身近な自然にどのような影響を及ぼしているのかを知るために、セミのぬけ殻を探し、その種類や数を調べます。今年も開催します。毎年同じ場所で調べ続けることで、自然の変化がみえてきます。その変化から地球温暖化の地域への影響について考えます。夏休みの自由研究の活用もできますので、ぜひご参加ください。

- 主催 長野県環境保全研究所
- 共催 市立大町山岳博物館
- 期日 令和7年8月1日(金) ※少雨実施
- 時間 午前10時～正午
- 集合 市立大町山岳博物館
- 会場 山岳博物館周辺(大町公園周辺)
- 対象・定員 主に小学生・20名(先着順)
- 参加費 無料
- 持ち物 飲み物、帽子、タオル、筆記用具
- 申込期間 7月1日～7月31日
(定員になり次第締め切り)
- 問い合わせ
長野県環境保全研究所
電話：026-239-1031 FAX：026-239-2929
Eメール：kanken-shizen@pref.nagano.lg.jp
- 申込方法
ながの電子申請サービス(長野県)で受け付けます。
下記のURLまたはQRコードにアクセスし、申込みをお願いいたします。
https://apply.e-tumo.jp/pref-nagano-u/offer/offerList_detail?tempSeq=56362



特別展「イラストレーター神田めぐみ 山小屋イラスト原画展」関連催し

トークショー

「神田めぐみ・シェルパ斉藤 山小屋を語る」

紀行作家でバックパッカーのシェルパ斉藤さんとイラストレーターの神田めぐみさんによるトークショー。山小屋での取材の裏側や山小屋にまつわるエピソードのほか、今後の山小屋や登山についての思いなどについて、お二人にお話しいただきます。

- 期日 令和7年7月13日(日)
- 時間 午後2時～午後3時
- 会場 当館 特別展示室
- 対象・定員 どなたでも30名
- 費用 参加無料ですが、入場には通常の観覧料(常設展と共通)が必要です。
- 申し込み 要事前申込。参加ご希望の方は電話・FAX・Eメールまたは直接、当館へ(先着順。定員になり次第締切)

博物館のひろば

植物標本棚を 寄附いただきました

令和6年12月24日(火)



山岳博物館では、収蔵する植物さく葉標本をサイエンスミュージアムネット(S-Net)を通して、公開しています。未整理の標本については、大町山岳博物館友の会サークル「花めぐり紀行」のメンバーの方に標本づくりをしていただいています。整理された標本数は現在14,000点余りとなりましたが、収蔵が限界に近づき、標本棚が不足していたところ、同サークルと個人2名の方から標本棚2台(400,000円相当)を寄附いただきました。大切に活用させていただきます。

企画展関連催し

令和7年4月27日(日)・5月10日(土)



令和7年3月9日(日)～5月10日(土)に開催した企画展「小学校の生きもの探索記」の関連イベントとして、特別授業「学校や家での楽しい観察」を開催しました。27日は植物を中心に大町西小学校で、10日は鳥を中心に美麻小中学校で行いました。西小学校では、企画展解説書にあるフキノトウやまつぼっくり、ハルジオンなど花の作りや実のつき方について当館学芸員から解説を行い、美麻小中学校では、シジュウカラやホオジロ、ニュウナイズメなどの鳴き声や姿などを講師の栗林勇太さん(信州野鳥の会会員)の解説で観察しました。

山のサイエンスカフェ in さんぱく2025

令和7年3月8日(土)



当館の学芸員や専門員らが日頃行っている調査研究の内容や収蔵資料に関する情報について、具体的な内容を市民や地域住民にお伝えする研究報告を毎年行っています。

このたびは、「テフラよもやま話(竹村健一)」、「農具川に棲む生き物(岡本真緒)」、「山に降る雪は減っていない(鈴木啓助)」、「志村寛(号・烏嶺)宛 牧野富太郎筆の書簡(関悟志)」の4つのテーマで報告を行いました。

ご参加いただいた方からは、様々な質問が寄せられ、地域住民の方々の関心の高さが伺われました。

『研究紀要 第10号』発行

令和7年3月31日(月)



博物館活動や北アルプスの自然史と山岳文化史などの調査研究に関する学術的な論文・報告等を掲載する刊行物『研究紀要』第10号を刊行しました。

今号は高瀬川流域の降積雪量の変動について、ミヤマオダマキの生活史および結実特性についてなど、様々な分野の計6つの論文や報告などを収録しています。

研究紀要は、バックナンバーを含め、全文をオンライン版として当館公式ウェブサイトならびにJ-STAGE上でも公開しています。ぜひ、ご高覧の上、ご活用いただければ幸いです。

企画展「小学校の生きもの探索記」 解説書発行

令和7年3月9日(日)



令和7年3月9日(日)～5月10日(土)に開催した企画展「小学校の生きもの探索記」の開催に伴い、解説書(A4判、67ページ)を発行いたしました。

近隣の博物館で活躍する学芸員や研究員、地域に根差して研究を続ける研究者8名が、「小学生のみなさんであれば、これは知ってほしい」というものをそれぞれの視点から、紹介した内容です。また、2年間にわたり調査した小学校で見られる昆虫や鳥についても紹介しています。

価格は1,700円と少しお高いですが、学校や家での観察の際の実践本としておすすめです。

山岳博物館のライチョウ保護活動 への寄附金をいただきました

令和7年4月9日(水)



有限会社 田中屋 様より今年も博物館のライチョウ飼育事業のために50万円の寄附金をいただきました。

当館では、ニホンライチョウの生息数の減少を食い止めるために、環境省や日本動物園水族館協会と連携して、飼育研究を実施しています。本年度も、当館で繁殖させたライチョウを中央アルプスの野生に戻す取り組みを進めています。

今回いただきました寄附金におきましても、ライチョウの飼育繁殖に関わる経費として有効に活用させていただきます。

付属園だより

「さんぱく付属園まつり」

令和7年5月3日(土)～6日(火・休)

例年5月の大型連休中に、付属園の動物や植物に親しんでいただくイベントとして付属園まつりを開催しています。

今年も計4日間の開催期間中に、クイズ&スタンプラリー、友の会ボランティアによるライチョウガイド、動物観察ツアー・植物観察ツアー、おおまびょんと遊ぼうの4つのイベントを実施し、延べ1,616人の皆様にご参加いただくことができました。

これらのイベントをとおして、ライチョウをはじめとする付属園内の動物や高山植物の特徴、形態などを学んでいただくとともに、山岳博物館の取り組みを知っていただく機会を提供できたのではないかと思います。(学芸員 岡本 真緒)



お詫びと訂正

前号の本誌『山と博物館』2025春号(第70巻第1号)〈令和7年3月25日発行〉に次の誤りがありました。ご関係の皆様には大変ご迷惑をお掛けいたしました、誠に申し訳ございませんでした。お詫びして訂正いたします。

訂正箇所 3ページ右段の写真説明

《誤》個人宅の庭で目撃されたライチョウ
(北安曇郡白馬村神城、2024年11月18日)【中村隆氏提供】

《正》個人宅の庭で目撃されたライチョウ
(北安曇郡白馬村神城、2024年11月18日)【中山隆氏提供】

人事異動のお知らせ

令和7年度に入り、当館職員に次の異動がありました。

《転出》 藤巻 孝之(館長)
※八坂支所へ転出
降旗 秀子(事務員)
※スポーツ課スポーツ推進係へ転出

《退職》 鈴木 啓助(名誉館長)
清水 博文(副館長)
降旗 孝浩(主幹)
辰己 萌恵(飼育員)

《新任》 太田 三博(館長代行)
※大町市教育次長
伊澤 美琴(飼育員)
※新規採用
降旗 孝浩(事務員)
※再任用

《内部異動》

千葉 悟志(副館長兼館長補佐)
※前任 山岳博物館 企画員(学芸員)

なお、鈴木名誉館長は退職となりましたが、引き続き有識者(名誉館長)としてご指導いただきます。

さんぱく 山博友の会だより

当会またサークル4団体(ボランティアの会・烏帽子の会・花めぐり紀行・山岳文化研究会)の活動は、博物館公式HPでご覧いただけます。

総会記念講演会

「見たことのないハナバチの世界 —安曇平のハナバチ調査—」

大町山岳博物館友の会では、4月13日(日)に令和7年度総会記念講演会を開催しました。理科教諭として長年ご活躍され、当地域の自然科学に精通されている当会員の腰原正己さんを講師としてお招きし、身近なハチのひとつ「ハナバチ」に関してご講演いただきました。

講師が住む安曇野市周辺で観察できたハナバチの仲間について詳しくご紹介いただき、身近な自然を知る良い機会となりました。

講演会の後半は、こうした市民レベルの調査研究である市民科学(シチズンサイエンス)から得られる学びや可能性について友の会の活動紹介も交え、参加者全員で考えました。



春の自然観察会

「博物ハイキング 一大峰西麓編—」

友の会主催事業として、5月11日(日)に大峰の西麓をフィールドにした春の自然観察会「博物ハイキング 一大峰西麓編—」を開催しました。

当日は好天に恵まれ、仁科神明宮から大峰西麓の古道を歩きながら、参加者同士で、各自得意分野を説明し合いました。野鳥、草花・樹木、地質・地形などの自然のほか、地域の歴史や雪形などの民俗についてもふれ、会員相互で学びあうことができました。



編集・発行

市立大町山岳博物館
立 OMACHI ALPINE MUSEUM

—創立1951年—

〒398-0002 長野県大町市大町 8056-1
市立大町山岳博物館 編集責任者 太田三博
TEL. 0261-22-0211 FAX. 0261-21-2133
✉ E-mail:sanpaku@city.omachi.nagano.jp
URL:https://www.omachi-sanpaku.com

2025

夏号

第70巻2号

発行日 2025(令和7)年6月25日

印刷 有限会社北辰印刷
〒398-0002 長野県大町市大町 3871-1
TEL.0261-22-3030 FAX.0261-23-2010